

近 況 報 告

浅 海 重 夫

巻頭言では主任を意識してそれらしい言辞を弄したけれども、ホンネとタテマエの両面がものごとにあるとすれば、巻頭言はタテマエで、つい先頃まではまだ若い者と呼ばれていた仲間のひとりの、主任などマッピラゴメンというのがホンネである。社会集団を運用させ、その集団の対内的および対外的利害を調整する管理者が必要であって、比較的年長者がこれに当るのがひとつの方法らしく、浅井先生が突然附属高校長に推された今年度にわかに主任教授になってしまった。およそ政治的なことが嫌い不得手、人を使うことも全く性に合わない者が、長と名づく役目をつとめることはいかに大儀なものか、性に合った人には判ってもらえないだろう。

難しい話はやめて近況報告にうつる。2人しかいない子供の2番目が今年大学生となり、人間のつとめの一端を完了した思っている。長男は来年卒業、しかし御多分にもれず就職難だが、それを苦にしているのか宮任えをまだしなくてよいとのんきに安心しているのかよく心理はつかめない。しかし経済力がついてやがて結婚でもされ、孫かなにかにとりまかれてマゴマゴしている姿を中生代頃の卒業生諸姉（注、お茶の水地理11号、94頁参照）に想像されると思うのは耐えがたい。つくづく娘でなくてよかったと感じている。

もうひとつ、ことしは家を造り直した。大へんおそまきながらようやく家族にそれぞれ個室を与えることが実現しただけのもの、何故か教室内で豪邸を建てたというあらぬうわさの種にされたく、ここに嚴重に抗議と訂正をいたしておく。何しろ大地震が予想されることでもあり、古邸ではすぐにひっくり返ってしまうので、耐震的に安心のつく家にしようと考え、はやりの軽量鉄骨プレハブではなく、木造の金融公庫規定の建築法に従った。予期以上に公庫の基準と検査がきびしくて驚かされたが、法は自分を守るための最低の規制であることを今回の建築に関する限り、身にしみて痛感した。

近 況

式 正 英

このところ忙しい忙しいとボヤき放しである。昭和50年5月から一般教育委員長になり、10月からは評議員を兼ねている。もはや大学人としての経験は短とはいえないもののひとから「両方とも激戦だよ」といわれながらも、始めのうちはボンヤリとしていた。それが両職とも普通の時期ではないのだから、殊更大変なのである。渦巻きの中に翻弄されて、我が身の姿勢を保つのがやっという有様である。足元からすくわれそうになり放して、前に後に大分傾いた姿勢なのではないかと我ながら思うことがある。大学の一般教育は現在全国的な規模で変革の時期に直面している。一般教育について大学関係者がこれまでどの程度真剣に考えてきたかに問題がある。専門教育と一般教育を